



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.80

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2014年3月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.icom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

緊急支援!

ニューオリンズ「ジャズ博物館」復興、再開を

日本からも応援しよう!!

ジャズ仲間呼びかけ、WJFも募金スタート

毎年夏の「サッチモ・サマーフェスト」会場にもなっているニューオリンズの「ルイジアナ州立博物館」(Old U.S.Mint=旧造幣局)の3階にジャズ展示コーナー「ジャズイクジビット」(通称:ニューオリンズ・ジャズ博物館)があった。ところがこの世界文化遺産とも言える博物館も、2005年8月のハリケーン・カトリーナで被災し、予算不足で現在も、閉鎖されたままになっています。そんな中、先ごろ元ジャズ博物館館長のドン・マルキさんから外山夫妻のもとに復興・再開支援を求めるメールが送られてきました。これを受けてWJFもさっそく行動を開始。今年8月のサマーフェストへの「サッチモの旅」で義援金を現地に届けるべく、6月末日までを“第1次募集”期間として募金をスタートさせることになりました。趣旨をご理解のうえ、ファンのみなさまのご協力のほど、よろしくお願い致します。



サッチモが最初に手にしたホルネットも、かつては、このようにジャズ博物館に展示されていたが…(2005年8月6日、小泉良夫撮影)

すでにスウェーデンやフランスも支援活動を始めている

WJFは今こそ“支援の輪”のイニシアティブを！

私たちにはニューオリンズの人々やメディアにも浸透させた“実績”がある

20世紀を代表する音楽「ジャズ」。そのジャズを生んだ故郷ニューオリンズには、ルイ・アームストロングを育てた社会とジャズ・パイオニアたちの貴重な資料があふれている。毎年夏の「サッチモ・サマーフェスト」会場にもなっている「ルイジアナ州立博物館」の3階にジャズ展示コーナー「ニューオリンズ・ジャズ博物館」があった。ジャズの故郷ならではの、世界一のジャズ資料の展示の場でもあった。ルイ・アームストロングが少年院で初めて吹いたホルネットと軍隊ラッパ。キッド・オリバーのトロンボーン。ビックス・バイダーベックのホルネット…それらがさりげなく飾られていて、アーリー・ジャズファンは腰を抜かす。それだけに海外からの支援もすでに始まっているという。あの“お宝”たちは、いったい今どこで、どうなっているのか？ WJFとしても早急に支援の手をさしのべたいのですが…。

世界中のファンも注目のコーナー 世界文化遺産的“お宝”がズラリ

ニューオリンズの「ジャズ博物館」のこのコーナーは、現地を訪れた世界中のジャズファンが、なんともその貴重な

7200ドルもの寄付が寄せられている。フランス・ジャズ・ソサイティーも支援活動を開始しているという。

3階ジャズ博物館展示コーナーの入り口からして、ファンは「ワオ！」というに違いない。ドアの10倍もありそうな、あのキング・オリバー、サッチモ、リル・ハーデンらバンドの大壁面写真が迎えてくれるのだ。

ちょっとこの写真のピントは甘いのですが、このコーナーの「New Orleans Jazz Goes International」には、日本を始め世界各国の主なデキシーランド・ジャズ・グループが、しっかり掲げられている(次ページの写真)。



3階「ジャズ博物館」入口の大壁面写真(写真上、この右下が入り口)。(写真右は)サッチモ・サマーフェスト会場で歓談するマルキさん(左)と外山恵子さん

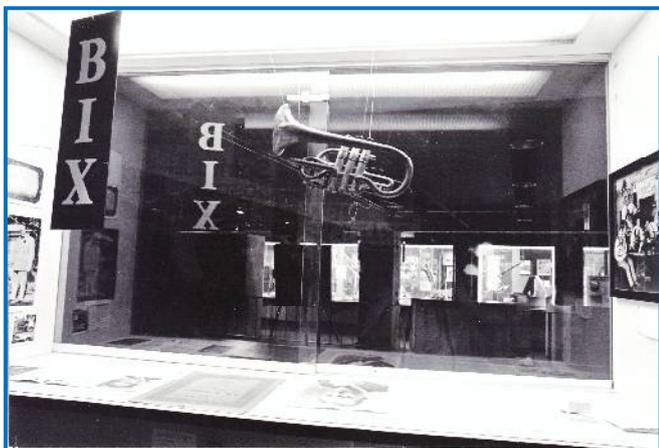


“ジャズ故郷”を見捨てないで！ 展示場の復活に今すぐ行動を！

「私たち日本ルイ・アームストロング協会は、なんとしてでも、このジャズの故郷の貴重な、また世界文化遺産的なこれらの展示コーナーを復活させるために、今すぐにも活動を始めたいと思っています」と外山夫妻。

ジャズの“お宝”に固唾をのんで目を向ける。だからこそ、すでにスウェーデンのジャズファンからは

そう！ニューオリンズって、まさに世界に最たるジャズの世界文化遺産。そんな運動だっただけです。



ジャズ博物館に展示されていたビックス・バイダーベックのホルネット(写真上)と、マニュアル・ペレのホルネットなどジャズの歴史に彩りを添えた貴重な楽器たち(写真右)



「ジャズ博物館」と展示コーナーの復活支援を呼びかけてきたドン・マルキ (Donald M. Marquis) さん。外山夫妻

とは、長年の親交もあり、サマーフェストでは、毎回いつも駆けつけてくれる方。そう、あの“ジャズの創始

者”バディ・ボールデン(cor)の研究家で、彼の埋葬地まで発見して、ジャズ史に新たな1ページを加えた方

昨年のサッチモ・サマーフェストで、現地を訪れた際も、外山夫妻にすぐさま歩み寄り、支援をいの一番に呼びかけたほどだ。来年2015年春の「フレンチコーナー・フェスティバル」にあわせて、再オープンさせたい意向だが、まだはっきりした最終復興スケジュールは出されていない。

**“銃に代えて楽器を！”に習って…
現地のメディアもきっと動いてくれる**

「ジャズは20世紀のアメリカが、世界にくれた最高のプレゼント。サンクスジャズの感謝をこめて、ニューオリンズのジャズ博物館再開を支援しましょう」と外山夫妻は、こう提案する。

「海外からの支援は、額は少なくとも、“銃に代えて楽器を！”のローガンがそうであったように、日本はもとより、現地ニューオリンズのメディアなど、みなさ

んの注意を呼び起こす効果があると思うんです。まずは多くのニューオリンズを愛するジャズファン、アマチュア、プロ

バンドに呼びかけ、なんと少しでも大きく広げていき、一日でも早くジャズ博



「ルイジアナ州立博物館」(Old U.S.Mint=旧造幣局)=この3階に「ジャズ博物館があった(同ホームページから)



サマーフェストの会場となって観客で埋め尽くされた博物館の正面広場=2010年撮影

博物館を再開させたいですね」

「もちろん、ご寄付をくださった個人、団体、企業、楽団…

すべての名前、寄付額を先方に寄付金と共に、今年8月に届けさせていただきます」と外山夫妻。

WJFとしては、そんなみなさんの“ご芳名”も何らかの形で、ニューオリンズにお届けしたいとも思って、頭を悩ませている。

そんなこともあって、振り込んでいただいた方々のお名前を把握する必

要があります。ローマ字にも直したいので、フリガナもつけて下さい。



ジャズ博物館のあるUSミント正面入り口=2013年8月のサマーフェストで

下記の郵便振替の「ニューオリンズ募金」口座へお願いします。

金額は「一口1000円」とします。複数口のご寄付もいただけたらありがたいのですが…。前述の通り、今年8月の「サッチモ・サマーフェスト」のさいに「サッチモの旅」で現地に届けたいと思います。6月末日までを“第1次募集”期間とさせていただきます、開館まで2年ほど続ける予定です。ご協力のほど重ねてお願い致します。



＜郵便振替＞

00140-4-741572

口座名 WJF ニューオリンズ募金

初のリーダー・アルバム『世界は日の出を待っている』
2014年の主役は恵子さん！新春に華麗な幕開け！
恒例の「デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」も席卷！

ジャズの新しい年をスタートさせるにふさわしい「デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」(第6回)が1月11日、今年も東京・千代田区日比谷公園の日比谷公会堂で賑やかに開催された。奇しくもこの日は外山恵子さんの初リーダー・アルバムがリリースされた日。会場ロビーで発売ほやほやのCDが注目の的となっ



た。WJFスタッフの熱心な呼びかけ、売り込みもあって、恵子さんのサインが間に合わないほどの売れ行き！この日のセインツの演奏(写真下)も、すべてこのアルバムからの抜粋だったことも功を奏したようだ。今年の幕開けは「祝・外山恵子」と行った感じ。デキシーランド・ジャズは、華やかに幕を開けました。おめでとうございます！



**JPMA新会長の白井克彦さん
外山夫妻の長年の活動称える**

開場14:15、開演15:00。でも、WJFスタッフの集合は午前11時。会報と恵子さんのCD発売のチラシを1000枚以上のプログラムに挟み込んだり、CD発売テーブルの準備をしたり…大わらわだった。開場と同時に新作のWJFサッチモ・コースターを入場者に手渡すのも大変な作業。そんなスタッフの作業もさることながら開演冒頭、主催者挨拶に立った新任の日本ポピュラー音楽協会会長(JPMA)、白井克彦さん(前早稲田大学総長=写真右)の言葉が何よりも印象的だった。



白井さんは、デキシーランド・ジャズの活気ある活動を称えたなかで、特に外山夫妻のニューオリンズとの長年にわたる密接な結びつきに触れ、それが東日本大震災の被災地とニューオリンズとの固い絆に連ねられていったことを高く評価していたこと。このイベントを監修、会場に元気な姿を見せ、WJFとも変わらぬ結びつきを

深めて下さっている同協会専務理事の瀬川昌久さん(ジャズ評論家)も、プログラムに寄せたメッセージのなかで、東北被災地のバンドがニューオリンズを訪問したことなど、外山夫妻が国際交流に果たした交流を高く評価していた。あれもこれもすべてWJF会員の皆さまのお力添えがあったのことにほかなりません。

**デキシー最高峰の5バンドが共演
共通の課題曲『私の青空』を熱演**

さあ、日本のデキシーを代表する5バンドが、今年もサウンドを競います。始めは全出演者が揃ってパレードしながらステージに“顔見せ”登場。そして「有馬靖彦とデキシージャイブ」の熱い演奏からスタート(写真①)した。今年は発売40周年とか。おめでとう！今年の各バンド共通の課題曲は『私の青空(My Blue Heaven)』。例年、それぞれのバンドが独特のスタイルで演奏するこの課題曲も、最大の楽しみ。超ベテランの有馬さん(c1=76歳)はお元気そのもので熱演した。

続いて「デキシーキャスル」(写真②)。なんとといっても

バンジーの青木研さん(若きリーダー、37歳ですって!)の演奏が会場を魅了。大ベテランの中川喜弘さん率いる「デキシーサミット」(写真③)、ご子息のトロンボーン奏者、中川英二郎さんが、今年は終始共演していました。

そして、外山喜雄とデキシーセインツ(写真④)。今年は、この日の恵子さんの初リーダー・アルバム『世界は日の出を待っている』(NOLA1401)が発売されたこともあって、すべてアルバムからの選曲。私など素人目(耳!?)にも、本当に心温まる

曲が揃っていて、しっかりと聴かせてくれた。その後のセインツの演奏も、このアルバムから



になりそうで、今年は“恵子さん一色”にしてしまうかも!? 3月2日の銀座「ジャズひな祭り」だって、恵子さんがリーダーの「外山恵子 & Jazz'n Babies」ですからね。いつも喜雄さんの陰に控えてシャイな恵子さん、今年も、みんなで応援しますよ。

例年絶妙な司会をされている牧岩雅夫さん(写真左上)までが、ステージでこのアルバムを紹介してくれて、普段はあまり宣伝じみたことをされない喜雄さんまでがCDの実物をかざして「これです!」といった感じでステージから観客のみなさんに、照れくさそうに差し出す。

そうです、今度だけは、そう来なくちゃいけません。

2月11日の横浜ライブ「バーバーバー(Bar Bar Bar)」、12日の浅草 HUB、22日の「アフタヌーン コンサート in



フィナーレは出演者34人全員による壮大なオーケストラだった。外山夫妻も小さく見えます。

銀座」…いずれも CD からの曲も交え、感動的でした。

セインツに次いで「菌田憲一とデキシーキングス」(写真⑤)。

リーダーの勉慶さん、しっかり父上“ソノケンさん”の伝統を守って活躍されている。ここで



なんと、今年もスペシャルゲストとして、北村英治さん(cl、84歳!)の登場、大喝采。北村さんは、東日本大震災支援で、サイン入りのボールペンを発売し売上金、400万円超を被災地に寄贈されている。「プティット・フルール(小さい花)」などしっかりと聞かせてくれた(写真上)。

さあ、フィナーレに入ります。今年は何と、出演者全員34人によるオーケストラ編成。外山さんは、「セッション」で、ステージ中央に立ちボーカルとトランペットソロを披露したものの、後はずっと一番後ろのトランペット席で終始バンドの一員として演奏していた。フィナーレは当然「聖者の行進」が会場を回る。例年に劣らず、なんとも感動的な幕切れ。編曲・指揮に当たった中川喜弘さん、「いやあ気持ちよかったなあ。こんな凄いジャズのオーケストラは、日本のどのフルバンドにもできないでしょうねえ」と、とっても嬉

しそうに話してくれた。本当にこれは素晴らしい演奏だった。来年はまた、何が飛び出すか、楽しみです。

(小泉良夫)

外山夫妻とセインツが中学校へ“出前” 初めてのジャズに子供たちは大感激！

中学生の子供たちとジャズ…これはなかなか感動的でした。この1月22日、外山喜雄とデキシシーセインツは、外山夫妻の地元浦安市にある市立見明川中学校でジャズの“出前コンサート”を行った。集まった子供たちは1～3年生の約300人と先生、保護者50人。外山さんの巧みな話術とセインツの熱演もあって、子供たちはスウィングして大感激。「全校が最高に盛り上がり、父兄、先生の目に涙も光っていました」——。そんなレポートも届けられた。

外山さんの早稲田学院高校の同窓生で卒業後、早稲田大学のジャズビッグバンド「ハイソサイアティ・オーケストラ」で活躍し、WJFの賛助会員でもある宮原明さん。宮原さんの知人でこの中学にお嬢さんが通学している内藤麻子さん、それに保護者の皆さま方のお骨折りもあってコンサートは実現した。なんとこの見明川中学校は、外山夫妻の長男、洋一さんの母校でもあった。

コンサートでは、ディズニースソングを始め、スタンダードの「リパブリック賛歌」や「A列車で行こう」などが演奏されたが、子供たちは、同校の校歌をジャズ風にアレンジしたことにびっくりして耳を傾ける。さら

にはジャズの故郷ニューオリンズで、その昔、楽器を買えない貧しい人たちが、いかにしてジャズを楽しんでいたかということ、櫛やボトル、たらい、洗濯板など身の回りの品を持ち出して演奏したことも実演、驚嘆の声が聞かれる。こうしたことは2010年、宇都宮市にある外山さんの母校、戸祭小学校などでもやって、大受けしましたね。これは、なんとしてでも、ジャズの楽しさを子供たちに受け継いでもらいたいという外山夫妻の“永遠のテーマ”なのです。

同校での吹奏楽部とのコラボ、ニューオリンズのパレード曲『セカンドライン』の共演とパレードもあって最高潮となった。

夫妻が何よりも感動させられたのは、直後に寄せられた「ジャズ演奏会を聴いて」の子供たちの感想文。300人全員からですよ。ほとんどのみんなが、ジャズを聴いたのは初めてだったが、みんなすばらしい感想をよせてくれている。たとえばこんな具合——。

くみなさんの演奏がかっこ良すぎて、鼻血出そうでした。私は夏まで吹奏楽部のパーカッションパートだったので、特にさばおさん(注:サバオ渡辺)のドラムのソロに、感激しました！！人に楽しさを与える演奏をするには、自分達がまず、楽しむことが大切なのだなど、皆さんの演奏をきいて感じました。すばらしい演奏を、ありがとうございました>(3年生の R. O. さん)。サバオさん、ほかの子供たちの感想でも大感激していましたよ。

こうした催しは、高校や老人ホームなどでも、次々と実施されていった。

(写真は、同校からの提供)



PIANO & BANJO 外山恵子さんの初リーダーアルバム CDリリース

外山恵子さん初のリーダーアルバムKEIKO'S NEW ORLEANS SPIRIT『世界は日の出を待っている』が、タイムリーに今年新春を飾った「デキシシーランド・ジャズ・ジャンボリー」の当日、1月11日にリリースされ、会場ロビーで販売された。WJFスタッフらの熱い呼びかけもあって、この日だけでなんと89枚も売れてしまった。「50枚しかサインしてこなかったのよ」という恵子さん、会場でのサインが販売に追いつかなかったほど。

さらに2月22日、東京・銀座の十字屋ホールで開催された「サッチモ&夢と魔法の国」では、恵子さんがたった5枚しか持ってこなかったもので、もちろん完売！

そのうち2枚お買い上げの磯野博子さん。「とても良かったので、お友達にも聴いてもらいたくて…」と。

私(小泉)も、予約などもどかしくて、ジャンボリー当日

に買って以来、CDデッキに納めたまま毎日、聴き惚れている。バンジョーの音色が、ライブで聴くよりも、素晴らしく澄んでいて、さすが名器なんだなあと再認識させられる。ピアノも「ピーター・パンサー・パター」なんか可愛らしいほど踊っている。

理事の奥村清文さんも言っていたが、セインツのコーラスが、実に生き生きしていて瑞々しい。「ハイ・ソサイティー・カリブソ」は底抜けの楽しさがあって、思わず一緒に大きな声で歌ってしまった。

逆に、喜雄さんのボーカルが泣かせたのは、「誰も知らない私の悩み」や「セントジェームズ病院」。ほんと涙がにじんできちゃった。私の大好きな「セントジェームズ病院」はいつものセインツ・バージョンとは違った演奏。

同曲の世界中すべてのバージョンを集めていらっしやるという、このCDのコーディネーター、佐藤修さんにもぜひ感想を聞いてみたい。ま、なんたって、お買い得！！



あのシャノン・パウエルがやってくる！！ 各地で公演、外山夫妻がナビゲーター

外山夫妻がニューオリンズでジャズ修行中の1968年から73年までの5年間、夫妻がともに活動したジャズ・ミュージシャンは数え切れない。さらには夫妻が目をかけ、世話を焼いてきた“サッチモの孫”ともいえる幼い子供たちも少なくない。彼らは、後に地元のみならず世界に羽ばたいていく。そのなかの一人で、常にあちこちから引っ張りだこの超有名ドラマー、シャノン・パウエルが近く初来日する。外山夫妻をナビゲーターとして北海道から名古屋まで公演旅行をするのだ。

そんな素晴らしいツアーが民主音楽協会(民音=MIN-ON)の熱意で実現した。題して「デキシーランド・ジャズの祭典」――。

まず、この右のモノクロ写真をご覧ください。当時、プリザベーション・ホールのマネージャーをしていた、今は亡きアラン・ジャッフェ(tuba)の隣でドラムを叩いている可愛らしい少年。この子がシャノンなのです。6歳の頃からドラムを始めたそうで、「この写真の当時は、まだ足がドラム・ペダルに届かなかったんですよ」とこの写真を撮った外山さん。



の事だった。

2012年夏の「サッチモの旅」では、ニューオリンズ市内の某一流ホテルに出演しているというので、外山夫妻、セインツともどもライブを聴きに行った。思わぬ珍客にシャノンは大喜び。みんなにドリンクまでご馳走してくれて、外山夫妻と広津誠さんも加わってのジャムセッションまで…(左の写真3枚)。

さて、そのシャノンとメンバー一行は、6月18日に来日し、神奈川・平塚市(6/20)を皮切りに茨城・筑波(21)、愛知・名古屋(22)、新潟・新発田(24)、北海道・旭川(26)、札幌(27)、函館(28)、帯広(30)、栃木・小山(7/2)、長野・岡谷(3)、東京・中野(4)、栃木・那須(6)…と廻って7月7日に離日の予定。

メンバーは、シャノン・パウエル(ds)、ケビン・ルイス(tp)、デヴィッド・ハリス(tb)、カイル・ルーセル(p)、ミッチェル・プレイヤー(b)、オレンジ・ケリン(cl)、セヴァ・ヴェネ(bj)、タニア・ブテー(vo)。

WJFの例会や昨年宇都宮市での公開で注目を集めた映像『サッチモは世界を廻る』(原題=Satchmo the Great)。外山夫妻が常々、これを各地で上映してサッチモ・スピリットをみなさんに広めたいと願っていた「夢の企画」、その第1弾が2月3日、夫妻の母校、早稲田大学…それも、出身母体のニューオリンズジャズクラブの部室もある戸塚キャンパス、学生会館地階のリハーサルルームで開催された(写真)。午後1時半、開場には、ニューオリの現役、OBらざっと50人が参集。同クラブ部長の松坂ヒロシ教授まで駆けつけて下さった。

最初の映像は、外山さん秘蔵のジャズ映像コレクションから、1967年12月20日(一説では翌68年1月)、米ABCテレビで放映された(原題=Operation Entertainment)。ベトナム戦争の最前線に向かう若き兵士たちの前でサッチモが『この素晴らしい世界』『ハロー・ドーリー！』などを披露する。うるんだ眼、感動の眼、にこやかに微笑む兵士たち…きっと不帰の兵士たちも少なくなかったに違いないが、このサッチモの演奏は兵士たちのハートにしっかりと刻み込まれたに違いない。

ついで「サッチモは世界を廻る」。1時間超のフルバー

ジョンの映像(モノクロ)を鮮明にデジタル処理し、日本語のスーパーインポーズまで加えたもの。もう何度も会報では、紹介させていただいているが、東西冷戦時代の1950年代、サッチモが3ヵ月間、ヨーロッパ、アフリカなど10カ

映像「サッチモは世界を廻る」公開開始 早稲田大学を皮切りに「出前します」



国を回ったドキュメンタリー。まさにアメリカの初代「音楽大使」で、ニューヨーク・タイムズ紙は「アメリカの秘密兵器は、マイナー・キーのブルーノートである」とこのツアーの特派員電として大々的に掲載したほど。

終わって、質疑応答には、さすがニューオリの学生さんらしく、サッチモと師匠のキング・オリバーの演奏方法の違いなどが問われた。外山さんがその微妙な違いをスカットで答えるなど、大変なジャズ教室となった。

ひと言挨拶に立っていただいた松坂教授。「素晴らしい映像を見せていただいたし、こんな素晴らしい先輩を持っているクラブは、ニューオリしかないでしょうね」と。

この早稲田大学での公開に続いて3月10日には、ユニバーサル・ミュージック・ジャパン(青山オフィス)にジャズ評論家、ジャズ出版関係者、ジャーナリストのみなさん(50~60人)に集まっていただき、映像『サッチモは世界を廻る』とエンターテインメント作戦』を出張公開する。

(詳細は次号で)

賑やか、華やかにWJF親睦JAZZクリスマスパーティー

「次はもっと大規模、盛大に…外山夫妻の国会表彰も！」

特別招待の石井一さんが“2大公約”「私が言ったことは、必ず実現させます」

WJF2013年(平成25年)の掉尾を飾る「懇親クリスマスパーティー」が12月23日、千葉・浦安市のオリエンタルホテル東京ベイB1F「HUB新浦安店」で開催された。今年も会員のみなさんはもとより、WJFを支えるVIPのみなさんが勢揃いした。なかを駆けつけてくれたの石井一さん(前日会長=写真右)の2大夫妻を国会表彰し、この3倍、いや10倍もの盛大なクリスマスパーティーを開催させます。石井さんが約束したことはなんでも実現しているようで…いかが？ 来年の大変な楽しみが飛び出してきましたよ。請う、ご期待！



でもお忙しい中前参議院議員本音楽家協会“公約”、「外山す」「来年は、倍もの盛大な

WJFが設立20周年を迎えます。お祝いの会があると思いますが、またみなさんと盛大にやりましょう！」とエールを送る。

恵子さんの初リーダーアルバムお披露目恒例の“飛び入りコーナー”も盛り上がる



演奏が始まる。今回の目玉は、何と言っても先日、収録が終わったばかりの“外山恵子さん、初のリーダー・アルバム” KEIKO'S NEW ORLEANS SPIRIT『世界は日の出を

待っている』のお披露目。収録曲のなかから「チャイナタウン・マイ・チャイナタウン」「リード・ミー・セイビアー」「ケイコズ・ブギー」がフィーチャーされ、大喝采を浴びる。クリスマスソングもたっぷりの40分。休むまもなく恒例の飛び入りコーナーに入る。飛び入りと

いっても、事前に予約殺到のコーナー。なんとってご覧のようにすべてセインツとの共演ですからね。これは一度出たら止められません。では、出演順にご紹介させていただきます

いろいろあった2013年の“総決算”14年はWJF結成20周年ですよ！

午後零時半開場で、早くから待ち構えていたみなさんが次々と入ってくる。即、飲み放題の始まりというのも嬉しい。例年お馴染みの山口義憲さん(会報「ワンダフルワールド通信」編集長)の司会で午後1時スタート。ユーモラスな外山夫妻のアニメ風クリスマス・ビデオのご挨拶が会場内の各ディスプレイに映し出されて笑いを誘う。本物の夫妻がステージに現れ、まずは今年の活動報告。本当にいろいろあった奇跡的な1年だったが、なかでも気仙沼のジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」がサッチモの旅一行とともに憧れの“ジャズの故郷”ニューオリンズを訪問、大歓迎を受けたことが特筆される。

その実現に奔走、多大なバックアップをしてくれた国際交流基金の松本健志さんもいらして紹介された。お隣の席には、WJF発足当時からニューオリンズへの楽器の輸送に大変なお力添えをいただいている森忠彦さんも来られていて、意気投合していたようですね。

祝辞と乾杯は、例年のサッチモの旅はもとよりWJFのイベントなどには、いつでもどこにでも欠かさず、ご夫妻でおいでいただいている中村宏さん(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授=写真上)。今年の活動を振り返った後、「来年は



きます。

(以下出演のみなさんと写真の番号)

- ① 山口義憲(bj)、鈴木芳郎(tp)、栗生清貴(ds)、樋口加鶴夫(b)、冨田由美子(vo)
みなさんによる「オール・オブ・ミー」
- ② 中村亜美さん(vo)「ラバー・カンバック・トゥ・ミー」
- ③ 石井修さん(vo)「ダイナ」
- ④ 伊藤咲子さん(ts)「テネシー・ワルツ」
- ⑤ 渋谷誠さん(hca)
「ダウン・バイ・ザ・リーバー・サイド」
- ⑥ 佐宗雅幸さん(tp)、府川弥生さん(p)
「イツ・ア・スモール・ワールド」
- ⑦ 高田房子さん(vo)「ワット・グレース・イズ・マイン」
- ⑧ 石井一さん(vo)「オール・オブ・ミー」「アイ・レフト・マイ・ハート・イン・サンフランシスコ」

外山夫妻や WJF のみなさんの周辺からも聞こえてくる「最近のジャズは、どこか親しめない」との声にもよく聞かれるが、私達(まあ石井さんと同じような世代)にとって、昔のジャズは良かった。ジャズは青春そのものだった。あんなに



楽しいものはなかった。石井さんはそんな声にもしっかり応えてくれた。そして、「セイントのみんなは一流だ、一流のジャズミュージシャンだ」とのお墨付きまでいただいた。

続いてステージに招かれた、今や最長老のジャズ評論家、瀬川昌久さん(写真上の右、左は司会の山口さん)も、戦前からのジャズをひもときながら、外山さんらのジャズは、アマチュアのみなさんも一緒になって演奏し、楽しめるジャズだとのエールを送って下さった。

飛び入りコーナーに続いて抽選会、プレゼント、じゃんけ

ん大会(写真下)…と、お楽しみは続く。景品は、奥山康夫さんからこの年も送られてきたディズニーグッズ、日本橋老舗手ぬぐい店の小林永治さんから梨園染めのジャズメン手ぬぐい、若林千鶴さん訳の「はばたけ、ルイ！」、水森亜

土さんから可愛いポーチなど、恵子さんの初リーダーアルバム、外山夫妻大臣表彰記念コンサートDVD、サッチモのCDつき絵本「おはなし音楽会」、サッチモ・サマーフェ

ストの公式Tシャツ、ミュージック・バッグ、ポストカード…たぶん 2

人に1人は当たっているはず。外れても全員にステキなプレゼント。全員に今年も会員の水越有造さん提供、サッチモ金太郎

郎飴やら新作サッチモ・コースター、メモ帳、トランペットのピンバッジ詰め合わせセットが配られた(写真上の下段)。

(13ページに続く)

なかでも、こちらから出演をお願いした特別ご招待、高田房



子さんと石井一さん。高田さんは早稲田ニューオリ出身。長い間、ニューオリンズに滞在して、地元子供たちに音楽教育を実施している「ルーツ・オブ・ミュージック」と

ともに活動、昨年来日したニューオリンズの高校生バンドとは、まさに“幼なじみ”。この年も現地に足を運び、彼らの“その後”に熱い目を注いでくれた。

セイントのメンバーは「みんな一流だ」「一緒に楽しめるジャズだ」のお墨付き

そして、石井一さん。歌よりも、「この場を借りて一言、言わせていただきたい」と、前述の“2大公約”。そして常々、

ジョージ・ルイス出生の原点、そしてその生涯に迫る テューレーン大学ジャズ資料館で伝説のクラリネット奏者を求めて



前回はニュー・オルリンズのテューレーン大学に保管されていたローレンス・マレロのバンジョーに関する資料を紹介させて頂きました。時間的には順序が前後しますが、この発見からさかのぼることおよそ2年、2011年の同じ時期にこのアーカイブを訪れたときに見つけた同地出身のクラリネット奏者、ジョージ・ルイスに関する資料をいくつかご紹介したいと思います。

まずは彼の出生に関する書類を2つ。

1. ジョージの洗礼証明書

トレメ地区にあるセント・オーガスチン教会 (Church of St. Augustin=写真右) が、彼の出生からおよそ1ヶ月後の1900年8月10日に洗礼を施した(Baptize)ことを証明するものです。名前は Joseph



Francis Zeno となっています。ルイ・アームストロングもこの教会で洗礼を受けていたことが知られていますが、二人が幼馴染だったことはドロシー・テイトが著書の中で触れています。もともと同じ教会の檀家さん(?) 同士だったわけですね。ルイ・アームストロングの正確な誕生日もこの教会の洗礼記録から判明したことが知られていますが、ジョージの誕生日はこの証明書にも通説と同じ1900年7月13日の日付が書かれています。

2. ジョージの出生供述書

ジョージの母親アリス・ゼノーが彼の出生を証言、宣誓した書類で、1957年1月28日に発行されています。おそらく何かの手続き(ツアーのための旅券取得とか)のために使用した出生証明書の代わりではないかと思います。アリスのサインが子供の字のように稚拙なのが大変興味深いところです。あるいは文盲だったかもしれない彼女が書類作成のために自分のサインを誰かに教わって書いたものと思われる。

次に、ジョージがジャズ史家のウィリアム・ラッセルと出会って地元ニュー・オルリンズでレコーディングのチャンスをつかんだ1940年代の資料から。

3. 旧ジョージ・ルイス邸売却の新聞記事

ジョージが1940年代に住んでいた St.フィリップ通り827番地の家屋が売却されたときの新聞記事のようです(おそらく『タイムズ・ペキューン(Time Picayune)』紙)。1970年6月28日の日付がメモされています。売却に際してももとは棟割の二戸一だったものを一世帯用に改装したというようなことが書いてあります。特にジョージの住まいだったことには触れていません。レンガを木枠にはめ込んで漆喰で固めた(この地方のレンガは柔らかいため)18世紀にこのあたりで庶民の家を造るときによく用いられた独特の工法で建てられたもので、その歴史的価値から新聞記事になったものでしょう。たまたまジョージ・ルイスの住まいだったため、この記事が資料館に収蔵されたものと思われる。

4. ジョージ・ルイスの私信

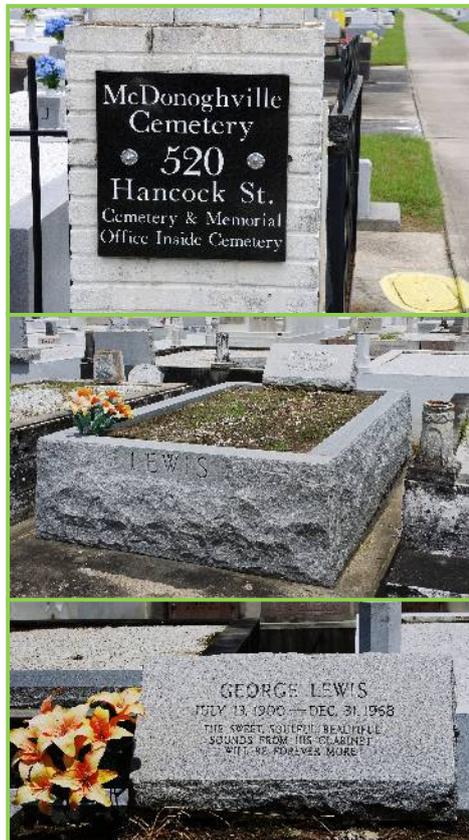
1943年9月1日の消印があります。ジョージがウィリアム・ラッセルに送った手紙で、ラッセルの住所はペンシルバニア州のピッツバーグになっています。内容は手書きの筆記体で書かれているのでよく分かりません。差出人の住所は上記の St.フィリップ通り827番地です。他にも同じようなものが何点かありましたが、このときは目に付いたうち一番古いものをコピーしてもらって持ち帰りました。今回(2013年5月)資料館を再訪したときに目に付いたものは全てコピーして持ち帰りましたので、いずれゆっくり解読(?) したいと思います。

5. ルイジアナ州オーリンズ郡地方民事裁判所の判決書

1944年10月27日の判決のようで、印刷が薄く詳しい内容は判然としないのですが、彼が Joseph Francis Zeno から George Lewis に改名したときの判決書(Judgment)のようです。George Lewis は通称で、彼の本名は Joseph Francis Zeno であるという記述もあるようですが、この日から彼の本名は正式に George Lewis となったというのが正しいようです。しかしながら、上記のウィリアム・ラッセル宛の私信は差出人が George Lewis となっていますので、改名が正式に認められる以前から George Lewis の名前を使っていたようです。

次は、ジョージがニュー・オルリンズ・リバイバルの中心として全米からヨーロッパにその名を知られるようになった彼の最盛期1950年代の資料です。

6. アメリカ音楽家連盟ローカル 496 の契約書



現在のジョージ・ルイスのお墓

ジョージがバンドを代表してサインした、1セッション4面のレコーディングを行うという契約書です。メンバーはジョージのほか、Joseph Watkins、Nathan Robinson、Lawrence Marrero、Alcide Pavageau、Alton Purnell、Avery Howardとなっています。英文の契約書が難しく詳しい内容は不明ですが、1953年にオハイオ州オックスフォードで行われたレコーディングの契約書が後追いで2年後の1955年4月23日に作成されたもののようです。手元のディスコグラフィアー(L. Faelt & H. Haekansson, "Hymn To George, George Lewis on Record and Tape" 2nd ed., Blood & Tears Productions, Sweden, 2001)によると、彼はこの年、上記のメンバーで国内をツアーしていたようで、3/19にオックスフォードでレコーディング・セッションと思われる演奏を12テイク残しています。The Miami Folk Arts Society presents The George Lewis Ragtime Jazz Band of New Orleans, The Oxford Series Vol.4, Recording Sessionがこれに該当するのではないかと思います。

7. ジョージのお墓の契約書

ジョージ・ルイスが生前の1954年11月にニュー・オルリンズの対岸、晩年の住まいだったアルジャーの隣町ジェファーソン郡グレタナ市にあるマクドノービル墓地(McDonoghville Cemetary)のお墓を購入したときの契約書です。日本語訳版ジョージ・ルイス伝(ドロシー・テイト著)の後書きで訳者の小中セツ子さんが触れておられる資料と同じものだと思います。9X6フィート1区画で45ドル、場所は R.Side DD Col. Lot# 6だそうです。

最後に晩年の1960年代の資料です。

8. 日本から送った絵葉書

1963年の日本公演中にロード・マネージャーだったブリザヴェーション・ホールのオーナー、アラン・ジャッフェが東京からオハイオ州シンシナティのロバート・シュタイン博士に宛てた日本の絵葉書です(通信欄コピーのみ所蔵)。ドロシー・テイトによればシュタイン博士は1958年にシンシナティでツアー中のジョージが倒れたときに診察して以来の主治医的な存在で、ジャッフェは日本公演が大成功でジョージの体調もよく、彼がシュタイン博士によろしく言っていることなどを伝えています。

9. ジョージの葬儀を伝える新聞記事

1969年1月4日の地元紙『タイムズ・ペキューン』紙に掲載された記事です。バンドに送られて出棺する様子が写真で紹介されています。火曜日に肺炎とインフルエンザ(Hong Kong Flu)のために死去、葬儀は金曜日の午後と書かれていますので、1969年1月3日だったと思われます。アルジャーのデアルマス通りにあるオリーブ・ブランチ・バプティスト教会にてサミュエル・J・エリソン師によって葬儀が執り行われた後、教会の聖歌隊による"Jesus Keep Me Near the Cross"の歌で式が終了、ジョージの棺はユーレ

カ・ブラスバンドの演奏に送られて自宅前を通過、墓地に向かったそうです。ユーレカのほかにオリンピア・ブラスバンド、そしてハーバード、イエールの学生やミネアポリスの医師、スウェーデン、東京から訪れたメンバー(オレンジ・ケリン氏と外山さんのことでしょうか)からなる混成バンドが葬送パレードに加わったことが伝えられています。この記事のおかげで晩年のジョージが住んでいたアルジャーの自宅住所も分かりました。現在もジョージの曾孫に当たるドミニク・ワトキンス氏が住んでおられるお家だと思いません。GoogleのStreet Viewで調べてみたところ、トム・ベッセル氏の本に載っていたジョージの自宅と同じ家が今も残っていました。

おまけ。今回の訪問でローレンス・マレロがウィリアム・ラッセルに宛てた私信を見つけましたのでこちらで紹介させていただきます。1943年8月30日に書かれたもので、彼が過去に共演したミュージシャン、演奏した場所、音楽を教えてくれた父親や兄弟についてラッセルに知らせたものです。おそらく彼を含むジョージ・ルイスの録音を世に出すことを考えていたラッセルの求めで自分のプロフィールを知らせたものだと思います。このとき彼はすでに43歳だと書いてありますが、それまで地元以外ではほとんど知られていなかった自分がいよいよミュージシャンとして独り立ちできるかもしれないという興奮と期待が伝わってくるような文面です。一方で、後に世界中を巻き込んで大きな社会現象となるニュー・オルリンズ・リバイバル前夜のラッセルとミュージシャンの出会いを捉えた貴重な資料でもあると思います。



現在のルイス邸とドミニク・ワトキンスさん
(上の写真、手前はワトキンスさんの姪っ子)

前回と今回見た資料の中にはミュージシャン達がウィリアム・ラッセルに宛てた私信のように彼が個人的に所有していたと思われるものがたくさんありました。詳しい経緯は分かりませんが、彼の死後これらの資料が何らかの形で同資料館に移管されたのではないかと思います。

ちなみに今回の資料館訪問の最大の目的であったキッド・トーマスの埋葬に関する資料はとうとう見つけることができませんでした。墓地の所在地ジェファーソン郡グレタナ市の市役所を訪ね、担当者があちこちに当たってお墓のロットまで調べて下さったのですが、すでにその場所に彼のお墓はありませんでした。無縁仏(?)として移動されてしまったのかも知れません。とはいえ、前回ジョージ・ルイスのお墓を訪れるときにいろいろと協力してくださった同市観光課の職員の方の消息を尋ねたところ、すでに別部署に異動していた彼女に役所の内線で連絡を取って下さり、2年ぶりに再会することができたのも嬉しいハプニングでした。今回のお墓参りにはたまたま別件でニュー・オルリンズを訪れていた日本人の方が同行して下さい、語学に堪能な方だったので大変助かりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。(終わり)

ニュー・オルリンズ「タイムズ・ペキュン」紙 1969年1月4日から

ジョージ・ルイスの最期を語るジャズ葬

(渡辺研介訳、写真:タイムズ・ペキュン紙)

ジャズ葬で2バンドが演奏

ジョージ・ルイスに捧げるミュージシャンたちの言葉

ポール・アトキンソン

ユーレカ・ブラスバンドのメンバー、ポール”ポロ”バーンズは金曜日の昼過ぎ、霧雨の降るオリーブ・ブランチ・バプティスト教会の外に立ってジョージ・ルイスの最後の旅を見送る時を待っていた。

「いいや、あいつはジャズ葬のことなんか一言も言っていなかったよ」。ユーレカ・バンドのメンバーがウォームアップを始めた頃、バーンズはそう答えた。つい先ほど「オールド・ラグド・クロス」で演奏を始めようと思ったばかりだ。「でもジョージは自分がジャズ葬で送られることは解ってただろうな。俺たちは誰もそんなことわざわざ遺言に書いたりはしないのさ。仲間内でそんな話をするだけでいいんだ」。

教会の鐘が鳴り、中では説教を終えたサミュエル J エリソン師が棺を閉じ、世界中の誰もが最も偉大なジャズ・ミュージシャンの一人であると認めるこのジャズ・クラリネット奏者の棺はいよいよ満員の教会から運び出されようとしていた。

パパ・セレスティン・バンド

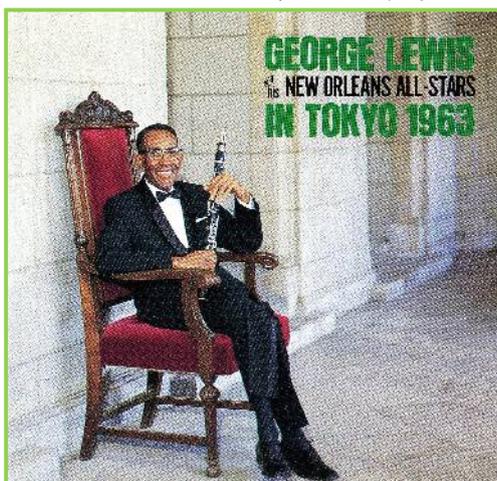
バーンズは言う。「俺たちはパパ・セレスティンのタキシード・バンドと一緒に演奏していたんだ」。「ジョージと俺はダウン・タウンの第7地区と第8地区で一緒に育ってね、二人とも7つか8つの頃にフルートを吹き始めたのさ」。

教会への葬送行進で演奏したオリンピア・ブラス・バンドのリーダー、ハロルド・デジャンはジョージとともにキッド・ハワードのブラスバンドで演奏したことを回想し、「あいつはどれほど素晴らしいミュージシャンだったか」と何度も繰り返していた。「あいつは素晴らしかった。それ以上の言葉

は見つからないよ」。デジャンはミュージシャンであればみなジャズ葬で送ってほしいと望むだろうと語る。「俺もそう思っているよ。俺のバンドが続いていたら、俺もジャズ葬で

送ってもらえるだろうね」。

「ジョージはローマン・カトリックの家に生まれ、メーソンでもありました」。ルイスが生前しばしば演奏していたプリザベーション・ホールを取り仕切るアラン・ジャッフェは言う。「こんな組み合わせはおそらくニュー・オルリンズでしかお目にかかれないでしょうね。彼は彼独自の信仰を持っていたのでしょ。ここで彼の葬儀が執り行われているのも教会が彼の家の近所だったからに過ぎません」。



ジョージ・ルイス「ジョージ・ルイス&ニュー・オルリンズ・オール・スターズ イン・トーキョー1963」(KICJ2077)のジャケットから

ユーレカ、オリンピアの両ブラスバンドの傍らで3つめのバンドがしばらく演奏した。このバンドはほとんどが白人で、ジョージを慕う10人のメンバーからなり、東京からやって来た日本人が1名、ハーバードとイエールの学生が各1名、ミネソタ州ミネアポリスの医師が1名、ストックホルムからやってきたスウェーデン人2名も参加していた。

肺炎とインフルエンザが火曜日にトゥーロ病院でこの世を去った小柄ではあるが偉大なジャズ・ミュージシャンの死因だった。68歳であった。

同じ運命辿る

エリソン師は故人を失った悲しみに涙する参列者に向かってこう語りかけた。「この日は誰にもやってくるのです。そして今日ここに集まった我々もまた、みな同じ運命を辿ることでしょう。死神は決して失敗するということはありません」。

彼は天地創造の昔からずっとこの仕事を続けているのです」。

歌声が鳴り響く中、師は説教を続けた。「あなたは日が沈み一日が終わるまで、そして『静かに、静かに』とあなたに向かって呼びかける神の声を聞くまで懸命に働きました」。

最後に聖歌隊が

「ジーザス・キープ・ミー・ニアー・ザ・クロス」を歌って葬儀は終了した。



G・ルイスのジャズ葬パレードでの外山夫妻 左端はピアニストのボブ・グリーン

ジョージの亡骸が教会の外に運び出されようとするその

時、一人の女性が半ばヒステリーのように叫んだ「彼なしで私はどうすればいいの！！」。

失神する女性

別の女性は失神し、故人に最後の別れを告げようとする参列者とジャズ葬を見物しようとする群衆の中を3人の友人に支えられて運ばれていった。

ジョージの最後の旅のために用意された霊柩車に棺が納められると、ユーレカ・ブラスバンドが悲しげに、そして心を込めて「オールド・ラグド・クロス」を演奏した。

この小さな教会の向かい側の歩道にいたある見物人は「これまでに経験したことない感動的な出来事だ」と話していた。

アルジャーズの小さな往来に過ぎないデアルマス通りは、もはや圧倒されるほどの群衆に埋め尽くされ、葬列に加わった救急車と車はゆっくり、ゆっくりと進み、カメラマンたちは葬送行進を少しでも良いアングルで撮ろうと車のボンネットによじ登り、レコーディング・エンジニアたちはユーレカ・バンドの友人との最後の別れをより鮮明に録音しようと



少しでもバンドに近い場所に陣取った。

ルイスの自宅近くで

行進がデアルマス 3327 番地にあるルイスの自宅であった小さく粗末ではあるがこぎれいな一軒家の近くを通りかかる頃、親しい友人が彼のことを話してくれた。彼の家のポーチにはいまだクリスマス飾りが残されたままだった。

「ジョージはこの家をとっても気に入っていたよ」。教会の鐘とユーレカ・ブラス・バンドの演奏が鳴り響く家の傍らに佇んだまま彼の友人は続けた。「あいつはニュー・オーリンズの廃屋2軒分から出た廃材をを800ドルで買い取って、橋を渡ってこ

っちまで運んでもらったのさ。その材木で大工が家を建てたっていうわけだ。やつの娘のシャーリーと2人の孫と一緒にこの家に住んでいたよ」。

「あいつは厳しいミュージシャンだった。妥協するってことが性に合わなかったんだろうね。いつも音楽



の中身にこだわって、誤魔化すってことが大嫌いだっただな。ジャズの本筋から外れるような演奏をする連中にも我慢がなかったのさ」。

デアルマスの通りを1ブロック進んだバンドは今も「オールド・ラグド・クロス」を演奏していた。(以下略)

(9ページから続く) そうそう、プレゼントといえば、会場に出されたデザートのリング…これも例年のように“ジャズの街”宇都宮の会員、関口美夫さんからの差し入れ。これを外山家で大奮闘し皮をむいて出された。まだあります。来場したお子様方や赤ちゃんにまでプレゼント！ま、クリスマスですからね。

大騒ぎが終わってまたまた演奏が始まる。恵子さんのCDにも収録されている「スワニー河」やクリスマスソング、「この素晴らしき世界」…傘やハンカチを手に手に会場をセカンドラインが行進する。この日のクライマックス！そして中締め。

ユーモアたっぷり、爆笑の中締め ご年配の同窓会ではなく若者を！

元ポニーキャニオン会長で日本レコード協会会長だった佐藤修さん(恵子さんのCDのコーディネーターもして下さった=写真上の左、右は磯野さん)が登場してユーモ



アたっぷりのご挨拶。

中でも印象的だったのは、「ポピュラー音楽というのは変わっていく、変わっていかなければならないということとでどんどん変わって行って、ジャズはわけがわからなくなってしまった。今はジャズを再認識するときなのです。どうかみなさん、ここは同窓会ではない(爆笑)のですから、若い人をジャズは楽しいという世界に引っ張り込んでください」という至言。次はもっと若い方々も…佐藤さんがおっしゃる

ようにわけが分

からないお孫さんまでも連れてきて下さいね。

磯野博子さん(ジャズ評論家、故いソノテルフさんの奥様)もいらして、三三七拍子の手打ちで締める。フィナーレ「聖者の行進」パレード(写真上)を最後に、聖者も使徒も！？みなさん家路についていった。きっと良い年をお迎えになったことでしょう。

(小泉良夫)



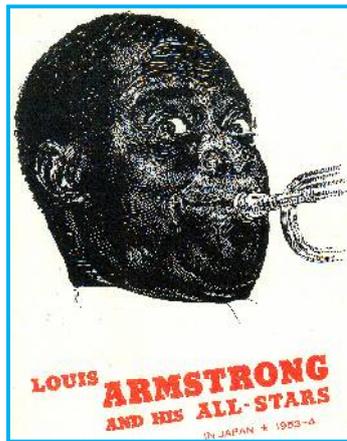
アメリカ在住のご婦人からのメールが思わぬ広がりを見せる

「1953年のルイ・アームストロングの横浜公演について」 初来日の詳細が届けられると“銃に代えて楽器を！”にまで目を向けて下さった

今年1月、「新春！デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」も無事に終えて間もない17日、外山さん宛のメールボックスに、「さちこ」というお名前の方からこんなお問い合わせのメールが入ってきた。「Subject: ルイ・アームストロングの横浜演奏はどこですか？」「彼が1953年12月31日に演奏されたとの記録をみましたが、横浜のどこでされたのか知りたいとおもいます。調べられたら是非お願いします。又どうしてこの記録がはっきりしてないのでしょうか、不思議です。お世話をおかけします」。「以前、確か、横浜ジャズプロムナードの柴田浩一さんから、その場所がどこであったか聞いた気がして、氏にお聞きしました」…外山さんのそんなことがきっかけで、「1953年、ルイ・アームストロング日本初公演」にまつわる“サッチモのちょっといい話”が思わぬ盛り上がりを見せている。そして“銃に代えて楽器を！”にまでも広がって行きそう。

12月31日、横浜「新フライヤー・ジム」 その“こけら落とし”がサッチモだった！

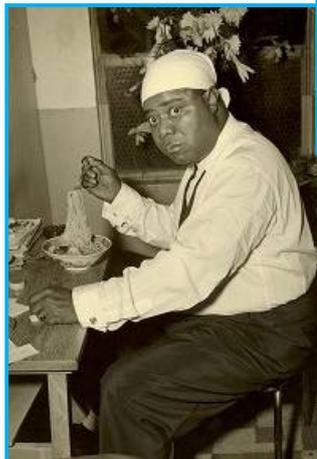
その“横浜ジャズプロムナード”の柴田さんから、すぐに外山さんに返事が来て、それが横浜公園内にあった「フライヤー・ジム」だったことが分かる。フライヤー・ジムは、当時横浜に進駐していた米軍用の大型多目的ホールで室内運動場としても盛んに利用されていた。ホームページなどで調べてみると、1953年(昭和28年)12月20日、この施設は横浜公園に移築され、この「新フライヤー・ジム」の“こけら落とし”を飾ったミュージシャンが、ほかならぬサッチモだった。



そんなことが分かって、外山さんは来日当時の、サッチモのラーメン写真や浅草国際劇場前の写真を添えて、さちこさんに知らせた。後に、このさちこさんは、アメリカ在住、今年83歳のご婦人と分かる。そのさちこさんからのご返事。

＜当時、偶然、親友に誘われてサッチモを見に行くはずだったが当日、風邪でダウン、果たせなかった。でも、情報を調べたらサッチモが横浜で12月31日に演奏…とある。一家の総領として家族の責任を負っていた自分が、どうして、暮れの大晦日の夜、外出の予定を受け入れたのか??? 不思議で仕方がない＞

さちこさんのそんな疑念を晴らしたのが外山さんの添付した写真。



＜浅草国際劇場の写真を見て、自分が行ったコンサートは、12月7-13日まで出演した、浅草だったのだ、とわかった＞と。さちこさんからの感謝メールも送られてきた。

＜わー、素晴らしいですね！お写真まで見つけて下さって。お礼の申し上げようがありません。本当にどうも有難うございました。私は今年83になるところ。22歳の当時、

総領として家族の責任を担い(とは良い言い訳ですが)ルイ・アームストロングに附いては全く無知でしたが、一方非常に夢中だった友達が切符を買いました。既に結婚していた彼女のご主人が急の仕事(運送屋さん)で行かれなく私をさそってくれました。“へー！”と思いながら受け入れましたが、当日風邪が悪化し辞退してしまいました。

彼女を昨年亡くしましたが、痴呆症の進んでいた彼女もアームストロングの歌を聞かせると笑顔できていました。然し何処で?と云う記憶は全くありませんでした。私も余り気を入れてなかったせいか、どこに行くはずだったか全く記憶が残っていません。＞

この浅草公演の写真で記憶が甦る あれは横浜でなく浅草公演だった！

＜然し調べたら出演は大晦日とのこと、不思議に思ったのは、どうして、当時の私が大晦日の夜に出歩くことを受け入れたのか不信でした。忙しい母をおいて一と。現在の社会では考えられませんが、当時は大晦日は大仕事でしたからねえ。でも、外山様の探索のお陰で謎が解けました。彼女は横浜の公演でなく、浅草の公演の切符を持っ



ていたのだと確信しました。今は

ルイ・アームストロングの歌を聴くとあの頃の日本社会が(皆真剣だった)思いだされ、淡い胸の痛みと同時に微笑みも浮かびます。

お忙しいところ、私の質問を受け入れてくださり、全く深く感謝致しております。又送ってくださった写真は、それこそ大切にしまっておきます。では、今年も元気にご活動をして！＞

「素敵な(また、ちょっと悲しい…)お話に出会いました」と外山さん。

その後、外山さんのもとに各方面から関連情報も相次いだ。

昔、南里文雄さんのバンドで、ベースをやっていたら、稲川実さん…今、80歳、FM新潟で、swing of inajie

のワンナイトスタンドをご担当で、稲川さんから、さらなる情報。

南里さんのバンドマンだった稲川さん 「サッチモと毎日ラーメン店に行った」

稲川さんは、1953年、サッチモと南里さんのバンドが、浅草国際で同じステージに立ったとき、楽屋口にいたら、サッチモに「どこへ行くんだ」と聞かれた。「ラーメンを食べに行く…」 「ん？それは何だ！？」ということで、サッチモをラーメン店に誘った。以来、毎日、ラーメン店でサッチモと一緒にラーメン食べたという。

稲川さんによると、12月31日、サッチモ・オールスターズは、やはり接收されていたルー・ゲーリック球場（ルー・ゲーリック・メモリアル・スタジアム=旧横浜公園球場）で演奏。その後、近くのフライヤー・ジムへ行き、夜更けにホテルに帰ったという。12月26日は、「フロリダ」で南里さん、秋吉敏子さんとジャムセッション展その辺、毎日一緒に行動したようです！

再びさちこさん。会報への転載も認めて下さった。

＜ご夫婦揃って楽しく頑張っておられるのですね！！素晴らしいです。会報を拝見させていただきました。とても Impressive です。

社会の歴史は個人、それぞれの歩みで作られるんですねえ！ 53年のアームストロングを中心にした皆さんの思い出、特に稲川さんのラーメンのエピソードは素敵です。あの頃アメリカでは黒人に対する扱いがひどくなるばかり、ステージではキヤーカー騒がれてもいざ町にでると、特に南部ではレストラン禁止、トイレは禁止、等。遂に60年4人の黒人大学生がアラバマで禁止されている Coffee Shop に静かに座り通して、あの62年の人権大運動の最初の火花を放ちました。そんな状態のアメリカからこられたアームストロングが日本のラーメン店でお客様として扱われ、美味しいラーメンをゆっくり楽しんでる写真を見て涙が出ました。

私の話ですか？ 現在でも疎くて恥ずかしいくらいです。あの時も無知の為、一生一度のチャンスを風邪の理由でミス、大ミスでした！！ もっと詳しくいたら、高熱を冒してでもと思い非常に残念です。でもこの様な層もあるということで使用できればどうぞ。＞

また、ジャズ評論家の中村宏さん(防衛医大名誉教授)から。

＜アームストロングが初来日した時、シルヴァーナ・マンガーノ主演の映画『にがい米』の幕間に、築地の東劇で、12月5日に最初の公演が行われました。国際劇場の公演は、その後開催されました。

東劇の公演は12月5日のみでした。6日にはアーニーパイル劇場(接收された東京宝塚劇場)で、進駐軍向けのコンサートがありましたが、一般には公開されませんでした。ホット・クラブ会長の村岡貞さんと二、三名の会員が、特別に招待されて行ったという話は聞きました＞

さらにサッチモ関連グッズの世界的コレクターで、元ポニーキャニオン会長の佐藤修さんから当時のサッチモのプログラムや、チケット、活躍を活写、詳細を伝える「SwingJournal」誌の1954年1、2月号コピー(写真下の中央)が、外山さんに送られてきて、これも、さちこさんにお送りしたところ、さちこさんからまたまた外山さんにステキなお便りが…。

＜ご親切なパッケージ今日届きました。佐藤様のお心遣いにも深く感謝しながら隈なく眼を通しすっかり感激。どうも有難うございました。

又 WJF の Newsletter 凄いですねえ！！ 楽しく拝見させていただきました。外山様お二人共素晴らしく活躍していらっしゃるんですね！！ 音楽は国際語、ジャズを通して世界をつなげる、特に銃の代わりに楽器をと努力されておられる

ことには全く感激です。

こちらアメリカでは、毎日のように Gun による事件が起きて居るにも関わらず、半数以上が憲法で与えられている権利と主張し、法律を変えることをこぼんでいます。Oregon 州もその一つですが、幸い学校で生徒が的になる

事件は余りありません。(勿論私の考えでは1件でも多すぎます。) 昨年この大学のクラスで一人の青年が論文を書きました。・Gun を自由に所持することは憲法で許されている。その権利を守ろう。と主張し、3歳の息子の誕生日に Gun を与えたとのこと。・私は彼に質問しました。ー あなたの息子はきっと頭が良く Gun の正しい使用を教えておら

れると思ひますが、世の中には良悪の判断に欠ける人が沢山存在している。その様な社会人が自由に Gun を持ち歩くについてどう考える？ー 彼の答はーそんな人たちの為に私たちの権利を失えない… 私の第2の質問ー Starbucks などでお客さんがのんきにコーヒーを飲んだり、PC で宿題などをしているところへ銃を肩にかけて入る考えは？ 彼の答はーあくまでも自分を保護するため。もう大人の観念を変える努力は無駄だと嘆きました。で子供たちを銃の代わりに Laptop を…の方向にと、おりおりしゃべっていますが、楽器には気がつきませんでした。自分が楽器音痴だからでしょうね！ 素晴らしいです。後このスローガンをお借りし、押すことにします。

世界中の子供たちが生きる楽しみを味わえる時が来ることを強く願っています。

今回本当にお世話になりました。深く感謝しています。お二人共健康で大いに活躍なさってください。＞

素晴らしい！ WJF の“銃に代えて楽器を！”が、また新たに輪を広げそうです。もとはといえば、サッチモが少年時代に銃を発砲して少年院に入れられコルネットに出会ったことがスタートラインですからね。さちこさん、いつまでもお元気で活躍下さい。



佐藤修さん所有の浅草のチケット



**海を渡った「スウィング・ドルフィンズ」
駐日米大使館 WEB マガジンが特集**



WJFの活動を支援してくれている駐日アメリカ大使館のWEBマガジン『アメリカン・ビュー』が、「ジャズの聖地に響いた被災地の子どもジャズバンド、復活のスウィング」として外山夫妻の特集を組んだ。(写真)

さらに、アメリカ大使館から同行された圓子博子さんの記事、『気仙沼ドルフィンズ、太平洋を渡る』もたっぷり。

皇居での信任状捧呈式のためにお出迎えした馬車から降りるキャロライン・ケネディー新大使の素敵な写真が表紙でトップを飾っている。

また、2013年5月にも、「JAZZ CONNECTION ~ “日本のサッチモ”が結ぶ日本とニューオーリンズの絆」としてこのマガジンに、記事掲載があった。

<http://amview.japan.usembassy.gov/>

<http://amview.japan.usembassy.gov/jazz-connection>

[-satchmo/](#)

の様子はお楽しみください。(山)



**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

- ◆中村義孝様
喜世子様(岩手・下閉伊郡、賛助会員) 56,000円
 - ◆鹿江政二様(文京区) トランペット
 - ◆名古屋純様(宝塚市) ソプラノサクソ
- 以前、長女がブルーノート大阪(現ビルボード)に勤務しており、移転改装の際、永年のジャズフリークである



親父(小生)に声をかけてくれ、店で使っていたテーブル、椅子、掲示板等と一緒にもらって来た物です。外山さんご夫妻の活動に敬意を表し、トラッドジャズのファンの一員として贈らせて頂ければ幸いです。

◆ 年賀状 感謝!

外山夫妻に送られてきた佐藤修さん(賛助会員)の年賀状。毎年、素晴らしいサッチモ版画賀状をいただいています!

募集中!

♪ジャズを愛する皆様
どうか会員になって下さい!!
また皆様のお知り合いの方々に
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

= WJF年会費 =

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通 : 5175119 “ワンダフルワールド”

お問い合わせは: WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email: saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン: Yahoo, Google で

<検索>ルイ・アームストロング

編集長から

ワンダフルワールド通信 80号のお届けです ▼巻頭では、ニューオーリンズの「ジャズ博物館」展示復活支援のお願いです。2005年のハリケーン以来、展示が閉鎖を余儀なくされていきます。具体的な支援、ご寄付については3面をご参照ください ▼1953年の大晦日にサッチモが横浜で演奏した。この件に関して米国在住の女性からの問い合わせに端を発して、各方面から情報が寄せられてサッチモに関する話題で盛り上がった。“ちよつといい話”がレポートされています(14面)

▼新春恒例デキシラン・ド・ジャズ・ジャンボリーで外山恵子さん初リーダー・アルバムがリリースされ大好評、本年幕開けにふさわしいコンサートとなりました(4面) ▼WJFスタッフの渡辺研介さんが、ジョー・ジュリスのジャズ葬に関するニューオーリンズ「タイムズ・ペキューン」紙69年1月4日号を翻訳、その時ニューオーリンズでジャズ修行中だった外山夫妻の写真も貴重なジャズの歴史の一コマです(12面) ▼WJFクリスマス会の賑やかなパーティーの様子は8面でお楽しみください